

[エクアドル]

住民参加で、ガラパゴスの生態系を守ろう

エクアドル沖約1,000キロの太平洋上に位置し、特異な生態系を有するガラパゴス諸島。近年、環境問題が深刻化する中、JICAの協力のもと、地域住民の参加による持続的な生態系保全の取り組みが進んでいる。

文 = 築瀬 二郎 (JICA専門家)
text by Yanase Jiro

Close Up!

ジャイカの
あしあと



ガラパゴスに多く生息し、青い足が特徴のアオアシカツオドリ。JICAの「ガラパゴス諸島海洋環境保全計画プロジェクト」のスタッフが海洋生態系調査の間、住民への教育と広報のために撮影している。世界自然遺産第1号で、エコツーリズムの大本ともされるガラパゴス諸島には、貴重な生態系が存在する。しかし観光などの発展により、人口が急増し、移入種やごみ処理、水質汚染などの問題が発生。周囲の広大な海洋保護区でも、漁業などによる生態系への影響が懸念されている。

ガラパゴス国立公園局などの行政機関や国内外のNGOは、これらの問題を解決するため、さまざまな対策を行っている。地域社会が協力して保全に取り組むことを目標とし、規制を決める際には、観光組合や漁協の代表者を含む参加型の管理委員会会議で決定されるが、利害関係による対立も多い。

その中で、JICAのプロジェクトでは、海洋保護区での参加型管理システムの強化を支援している。例えば、テレビやラジオなどメディアを使った漁業に関する情報伝達、環境教育コミュニティセンターや、地元の高校での海洋生態系に関する授業を通じた住民への環境教育、漁業規制の基礎データとなる海洋生態系調査、生活用水などの水質調査。そして漁業者の代替生計手段としての体験漁業や土産物を作る婦人団体への支援など。希少な生態系を持つガラパゴスには、保全を目的とした多くの援助機関が集まるが、国立公園局職員たちは、「地域社会に直接働き掛ける活動の支援はJICAだけだ」と語る。

ガラパゴスは昨年、ユネスコ（国連教育科学文化機関）により危機遺産リストに登録された。それ以降、エクアドル政府は、ガラパゴスの環境問題を最重要課題に位置付け、行政改革に取り組んでいる。これまでもさまざまな厳しい規制による管理をしてきたことで、保護区管理の大本ともされるガラパゴスだが、増え続ける住民の問題を参加型管理でどう解決していくのか、注目される。

